

第4節 前胴長方形分割の三角板短甲

1. はじめに

文殊堂11号墳から出土した三角板革綴短甲は、前胴の中段地板を三角形に分割せず、長方板革綴短甲と同様の形状を呈する。本例は、三角板の地板形状が台形状をなすこと、覆輪技法に簡略化がみえることなど、三角板革綴短甲の中でも新しい様相が多く見出せる。いっぽう、林2号墳から出土した三角板鉢留短甲は、前胴が横矧板鉢留短甲と同様の地板構成である。鉢頭径や連接数、連接位置、地板と帶金の比率、地板形状などに新しい様相が多く看取でき、三角板鉢留短甲のなかでも最新相に位置づけることができる。

本稿では、円田丘陵の古墳群から出土した2領の短甲の位置づけを明確にする作業を基礎に、従来、個別に扱われることが多かった三角板革綴短甲と三角板鉢留短甲を「三角板短甲」として一連の形式群と捉え、その地板構成の変遷を革綴製品と鉢留製品を横断して示す。文殊堂11号墳例と林2号墳例は、ともに前胴の地板に長方板もしくは横矧板を用いる点で共通する。以下、こうした前胴に特徴的な地板形状が看取できる短甲を、「前胴長方形分割」の三角板短甲と呼び、その系譜関係を中心に検討を加えた。

2. 前胴長方形分割の三角板短甲をめぐる研究史

(1) 三角板横矧板併用鉢留短甲の認識

前胴長方形分割の三角板短甲は、革綴短甲よりも鉢留短甲において、その存在が古くから知られていた。後胴に三角板、前胴に長方形分割の地板（横矧板）を用いる鉢留短甲は、「三角板横矧板併用鉢留短甲」と呼ばれ、その評価にかんしては、鉢留短甲の変遷を跡づける上で学史的に重要な位置を占めてきた。短甲の型式名としては、鉢留短甲の変遷大綱を示した野上丈助の業績中に現れる。野上は、鉢留短甲が三角板鉢留短甲から横矧板鉢留短甲へ移行することを指摘する中で、両者の移行期にあたるものとして大阪府西小山古墳例、長野県新井原7号墳例をあげ、「横矧板三角板併用短甲」とした（野上1968、p24）。追って小林謙一も、大阪府狐塚古墳例をあげ、前胴に横矧板を用いる三角板鉢留短甲を横矧板鉢留短甲への移行期の様相を示すものとして把握した（小林謙1974、p54）。さらに、千葉県八重原1号墳1号短甲（短甲I）を取り扱った田中新史によても「併用式」という名称が使用されている（田中新1975）。1980年代の甲冑研究においても、「三角板横矧板併用鉢留短甲」は、三角板鉢留短甲から横矧板鉢留短甲に変遷する移行期に製作された特定型式として捉えられ（田中晋1981、小林行1982、藤田1984）、現在においてもその認識は広く受け入れられている。

この系列の鉢留短甲に一定の製作時期の幅を認めたのは、吉村和昭である。吉村は、鉢留短甲に使用される鉢の大きさと鉢数に着目し、鉢留短甲の編年作業に先鞭をつけた。その中で、「三角板横矧板併用鉢留短甲」にも、古相を示すものと新相を示すものがあり、独立性をもつ系譜として認識可能だと捉えた（吉村1988）。この変遷観は、吉村の着想を基礎に方法的整備を進めた滝沢誠によっても踏襲されている（滝沢1991）。

「三角板横矧板併用鉢留短甲」という名称は、1990年代以降、甲冑の詳細な報告書が数多く刊行される

中で、京都府宇治二子山南墳や、島根県塚山古墳、奈良県後出3号墳などの報告においても使用されている。しかしながら、後述するように、「三角板横矧板併用鉢留短甲」とされるものの中には、三角板革綴短甲との関連がうかがえるものもあり、包括的に「横矧板併用」という鉢留短甲に限定される型式名を用いることには若干の問題がある。そこで、本稿では、「三角板横矧板併用鉢留短甲」を三角板鉢留短甲の範疇として捉え、地板構成の系譜を明らかにした上で、再度、型式の定義について検討を加えるという手順を踏むことにしたい。

(2) 前胴長方板分割の三角板革綴短甲の認識

三角板鉢留短甲のほかに、三角板革綴短甲においても、前胴に長方形の部材を用いるものが存在する。比較的古い年代の報告例としては、奈良県新沢508号墳で出土した短甲があげられる（石部1981）。この短甲は後胴に等角系三角板（阪口1998）を、前胴に長方板を用い、報告書中では「三角板・長方板併用革綴短甲」と紹介された。本例は、類例が少ない等角系三角板革綴短甲に位置づけられ、長方形分割される前胴の地板構成からは、比較的古い段階の長方板革綴短甲との関連も見出せる。短甲生産の初源的段階から、三角板革綴短甲と長方板革綴短甲の折衷的な製品が存在していることが知られる。新沢508号墳例を、「三角板横矧板併用鉢留短甲」の評価と同様に、長方板革綴短甲から三角板革綴板短甲への移行段階を示す事例として評価する捉え方（藤田1984）もあるが、こうした折衷的短甲のその後の系譜については資料が乏しく明確にできない。

分割単位が大きい鈍角系三角板革綴短甲（阪口1998）の中に、前胴に三角形の分割を行わないものが広く知られるようになったのは、大阪府鞍塚古墳例の報告以後（末永（編）1991）である。鞍塚古墳例は、前胴中段地板に長方板革綴短甲と同様の1枚の鉄板を用いるものである。鞍塚古墳が鉢留冑や鉄製鞍金具を伴出する鉢留技法導入期の築造であることから、前胴中段地板に長方板を用いる事例は、三角板革綴短甲の中でも新しい様相を示すものと認識されていく（滝沢1999）。とくに、三角板革綴短甲の編年を進めた阪口英毅によって、前胴に長方板を用いる一群が鈍角系「Ⅲ式」とされ、新相を示す指標の一つとされた（阪口1998）。筆者も、阪口の作業に導かれながら、三角板短甲の地板構成を整理し、後胴中段地板の分割枚数と前胴中段地板の形状から鈍角系三角板短甲の地板構成を6型式に分類し、革綴短甲の編年にかかる視点を提供するとともに、鉢留短甲への移行についても視野を広げる必要性を説いた（鈴木2004・2005a）。

上記のような研究史を踏まえ、本稿では、文殊堂11号墳、林2号墳出土短甲の編年的位置づけを検討する。具体的には、地板を構成する枚数と配置に注目する。前胴長方形分割の三角板短甲を中心に革綴製品、鉢留製品の変遷観を示し、三角板革綴短甲および三角板鉢留短甲の終焉の問題について考えてみたい。

3. 鈍角系三角板短甲における地板構成と変遷

(1) 地板構成にかかる分類

地板構成 三角板短甲は、阪口英毅が明らかにしたように（阪口1998）、等角系と鈍角系に大別できる。本稿では、このなかでも資料数が圧倒的に多い鈍角系三角板短甲を取り上げる。検討の中心となる前胴長方板分割の三角板短甲もほとんどが鈍角系三角板短甲である。

鈍角系三角板短甲の地板構成を後胴中段の地板枚数と前胴中段の地板形状をもとに分類する（鈴木2004）。鈍角系三角板短甲は、脇部を含めた後胴長側第1段の地板枚数の違いにより、7枚、5枚、3枚

第26表 三角板短甲の地板枚数と配置

	三角板 構成類型	前胴地板 配置	上段(堅上2)		中段 (長側1)	下段 (長側3)	地板分割 枚数	開閉構造 /備考	実際の枚数 [中段, 下段]
			後胴	前胴					

等角系三角板革綴短甲

滋賀県安養寺大塚越	—	B	7	4	21	17	49		
栃木県佐野八幡山	—	Z (B)	5	4	15	17	41		
富山県谷内21号	—	B	5	4	15	15	39		
福井県向山1号(1)	—	Z	5	4	13	14	36		
東葉福泉洞4号	—	B	5	4	13	11	33		
福岡県井出ノ上	—	Z	5	2	(13)	(11)	(31)		

鈍角系三角板革綴短甲

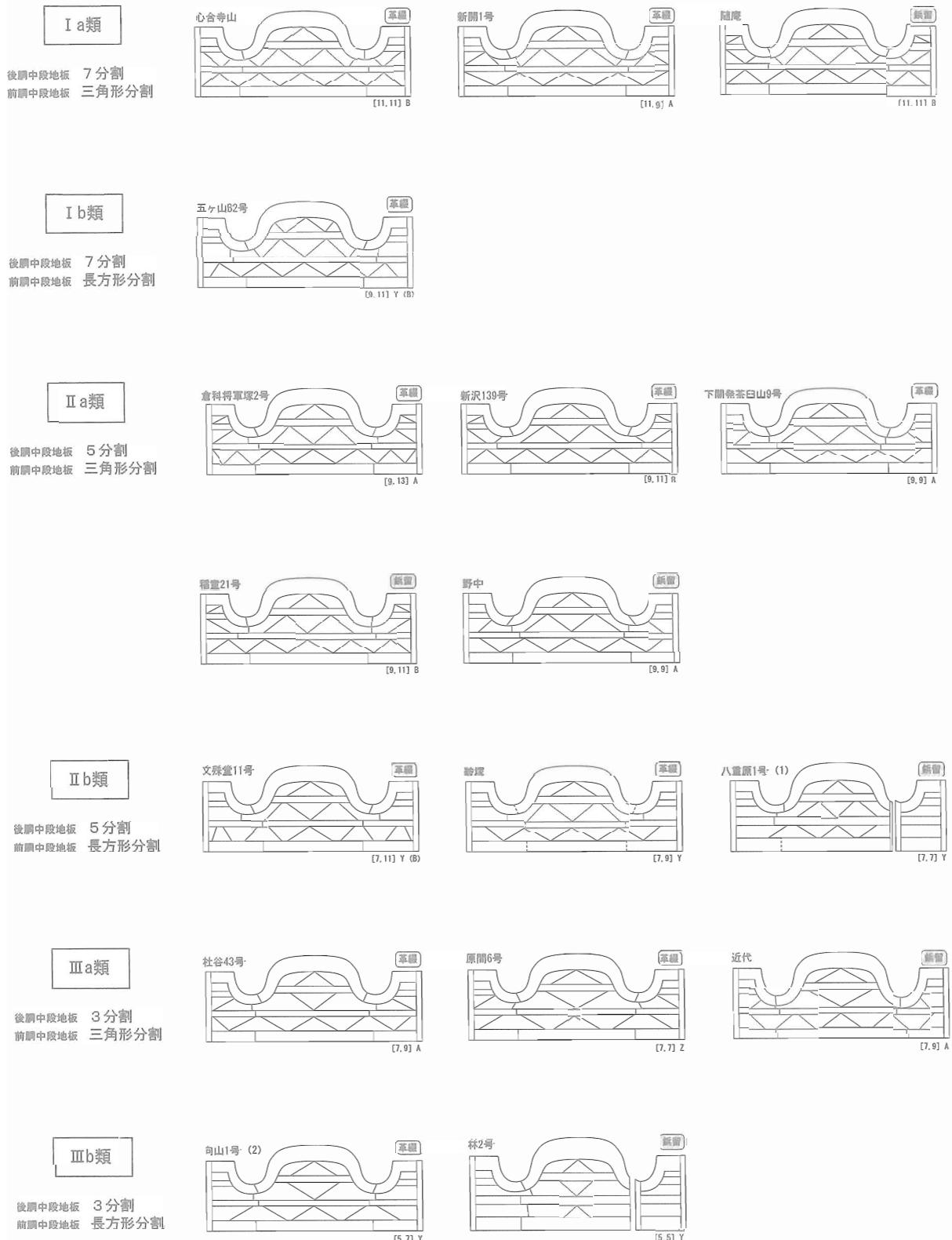
岐安道項里13号	I a	B	5	4	11	11	31		
大阪府嵐山1号	I a	B	3	4	11	11	29		
大阪府心合寺山	I a	B	3	2	11	11	27		
陝川玉田68号	I a	B	3	2	11	11	27		
京都府岸ヶ前2号	I a	A	3	2	11	11	27	後胴逆配置	
滋賀県新開1号	I a	A	3	4	11	9	27		
静岡県五ヶ山B2号	I b	Y (B)	5	2	9	11	27		
長野県倉科持軍塚2号	II a	A	3	4	9	13	29		
京都府ニゴレ	II a	A	3	2	9	12	26		
徳島県恵解山2号	II a	Z	3	2	9	11	25		
奈良県新沢139号	II a	B	3	4	9	11	27		
岐阜県龜塚	II a	B	3	2	(9)	(11)	(25)		
兵庫県年ノ神6号	II a	A	1	2	9	11	23	後胴逆配置	
大阪府盾塚	(II a)	A	3	2	9	(9)	(23)		
福岡県老司	II a	A	3	2	(9)	9	(23)		
石川県下開発茶白山9号	II a	A	3	2	9	9	23		
京都市私市円山第2主体	II a	A	3	2	9	9	23		
大阪府御園子塚第2主体	II a	A	3	2	9	9	23		
福岡県堤当正寺	II a	Z	3	2	9	9	23		
群馬県長瀬西	II a	A	3	2	9	9	23		
静岡県千人塚	(II a)	A	3	2	(9)	(9)	(23)		
京都府私市円山第1主体	(II a/III a)	A	3	4	(7/9)	9	(23/25)		
静岡県文殊堂1号	II b	Y (B)	3	2	7	11	23		
大阪府鞍塚	II b	Y (A)	3	2	7	9	21		
宮崎県六野原8号地下式横穴	II b	Y (A)	3	(2)	(7)	(9)	(21)		
福岡県花蓮	(II b/III b)	Y (B)	3	2	(7)	(7)	(19)		
金海杜谷43号	III a	A	3	2	7	9	21		
奈良県ベンショ塚第2主体	(III a)	A	3	2	7	9	21		
香川県原間6号	III a	Z	3	2	7	7	19		
福井県向山1号(2)	III b	Y	3	2	5	7	17		
石川県後山無常堂	(III b)	Y	3	2	(5)	(5)	(15)		

三角板鉄留短甲

岐阜県中八幡	I a	B	5	4	(11)	(11)	(31)	胴一連	[13, 13] ?
奈良県塚山	I a	Z (B)	3	4	12	11	30	胴一連	
岡山県隨庵	I a	B	3	4	11	11	29	胴一連	
大阪府珠金塚北榔	I a	B	3	2	11	11	27	胴一連	
奈良県市屋今田1号	I a	B	3	2	11	11	27	右脇開閉	[11, 12]
福井県二本松山	I a	Z	5	2	11	9	27	胴一連	
福岡県稻童21号	II a	B	3	4	9	11	27	胴一連	
大阪府黒姫山(2)	II a	B	3	2	9	11	25	胴一連	
三重県小谷13号	II a	B	3	2	9	11	25	両脇開閉	[9, 13]
石川県和田山5号	II a	B	3	4	(9)	(11)	(27)	右脇開閉	[9, 12] ?
咸陽上陌里	II a	B	3	2	9	11	25	右脇開閉	[9, 12]
奈良県新沢115号	II a	B	3	2	9	11	25	右脇開閉	[9, 12]
神奈川県朝光原1号	II a	B	3	2	9	11	25	右脇開閉	[9, 11]
長野県溝口の塚	II a	B	3	2	9	11	25	右脇開閉	[9, 11]
大阪府野中	II a	A	3	2	9	9	23	胴一連	
兵庫県小野王塚	II a	A	3	2	9	9	23	胴一連	[9, 10]
奈良県円照寺墓山1号(1)	II a	A	3	4	9	9	25	両脇開閉	[9, 11]
宮崎県下北方5号地下式横穴	II a	A	3	2	9	9	23	両脇開閉	[9, 11]
千葉県八重原1号(2)	II a	A	3	2	9	9	23	両脇開閉	[9, 11]
大阪府黒姫山(4)	II a	A	3	2	9	(9)	(23)	両脇開閉	[9, 9] ?
奈良県後出7号	II a	A	3	2	9	9	23	右脇開閉	[9, 10]
滋賀県雲雀山2号	II a	A	3	2	9	9	23	右脇開閉	[9, 9]
兵庫県法華堂2号	II a	A	3	2	9	9	23	右脇開閉	[9, 9]
宮崎県島内3号	II b	Y	3	2	7	9	21	胴一連	
奈良県円照寺墓山1号(2)	II b	Y (A)	3	2	7	(9)	(21)	両脇開閉	[7, 11] ?
千葉県八重原1号(1)	II b	Y	3	2	7	7	19	右脇開閉	[7, 7]
大阪府西小山古墳	II b	Y	3	2	(7)	(5)	(15)	両脇開閉	[5, 5]
滋賀県新開1号	(III a)	A	3	2	(7)	9	(21)	胴一連	
三重県近代	III a	A	3	2	7	9	21	胴一連	
東京都御嶽山	III a	A	3	2	7	9	21	両脇開閉	[7, 11]
京都府二子山南(1)	III b	Y	3	2	5	5	15	右脇開閉	[5, 5]
静岡県林2号	III b	Y	3	2	5	5	15	右脇開閉	[5, 5]
昌寧校洞3号	(III b)	Y	3	(2)	(5)	(5)	(15)	右脇開閉	[5, 5]
長野県新井原7号	III b	Y	3	2	5	5	15	右脇開閉	[5, 5]
奈良県後出3号第2主体	III b	Y	3	2	5	5	15	右脇開閉	[5, 5]

パーゲン内の情報は不確実であることを示す

前胴長方形分割の三角板短甲



第221図 三角板短甲地板構成の諸例

第27表 鈍角系三角板短甲の地板構成

構成類型	阪口分類 (阪口1998)	前胴地板配置	地 板 枚 数															
			11, 11		11, 9		9, 13		9, 11		9, 9		7, 11		7, 9		7, 7	
			革	鉢	革	鉢	革	鉢	革	鉢	革	鉢	革	鉢	革	鉢	革	鉢
I a類	鈍角系I式	A・B	○	●	○	●												
I b類	鈍角系I式	Y (B)							○									
II a類	鈍角系I・II・IV式	A・B・Z				○		○	●	○	●							
II b類	鈍角系III式	Y (A)・Y (B)									○		○	●	△	●		
III a類	鈍角系II式	A・Z									○	●	○					
III b類	鈍角系III式	Y										△		○		●		

○：革綴短甲 ●：鉢留短甲 △：革綴短甲で存在する可能性がある

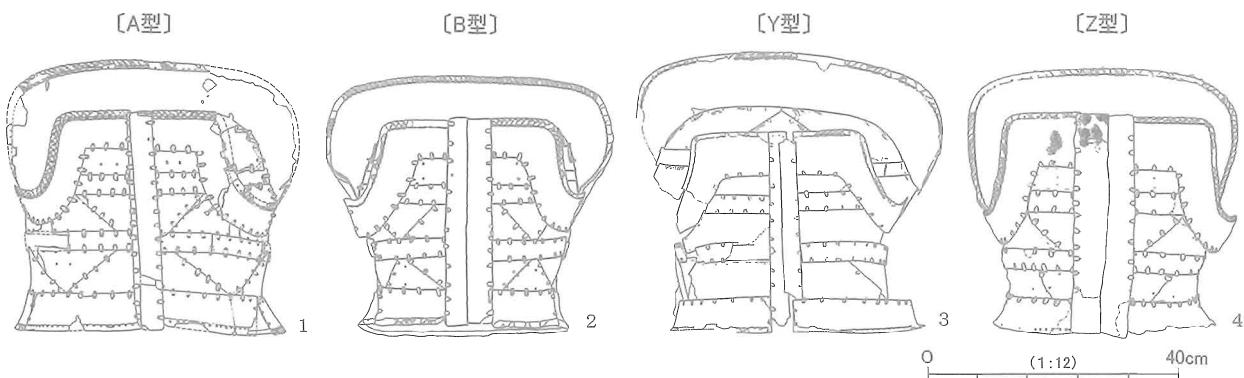
を数える3群に分離できる。それぞれ、I類、II類、III類とする。また、それぞれの類型のうち、前胴中段地板を三角板で分割するものをa類、前胴中段地板を分割せず1枚の部材で構成するものをb類とし、合計6類型に分類する（第26表、第221図）。

地板枚数 三角板短甲の地板枚数にかんしては、多様性がみられる中段地板と下段地板の構成枚数に注目する。以下、短甲の地板枚数を示すにあたり、中段地板の枚数と下段地板の枚数を順に括弧内に表す。文殊堂11号墳例は、[7, 11]、林2号墳例では、[5, 5]と表記する。なお、鉢留短甲の中には、割付上は一つの三角形の地板であるものが、脇部や開閉部で二枚に分割されている場合がある。革綴製品と鉢留製品との地板構成の比較を容易にするため、こうした事例は割付上の構成枚数を重視し、実際は2枚の地板を1枚として数える。実際の地板枚数については、検討の俎上にあげる第26表に明示する。

前胴地板配置 三角板短甲には、前胴の地板配置にかんして、分割線が鼓形を描くものと、菱形を描くものの2系統が知られている。前者をA型、後者をB型とする（小林謙1974、鈴木1996）。また、前胴を長方形分割（横矧板）にするものはY型とし、文殊堂11号墳例のように、前胴中段地板のみに長方形分割する事例もY型に含める。A型、B型、Y型のどれにも属さない変則的な地板配置をもつ事例はZ型とする（第222図）。なお、Y型、Z型ともに、A型、B型との関連がうかがえる場合、括弧で関連がうかがえる地板配置を示す。

（2）鈍角系三角板革綴短甲の変遷

変遷観 鈍角系三角板革綴短甲は、古墳時代中期前葉に定型化し、鉢留技法導入後までの比較的長期間にわたり生産されている。資料ごとの差異も大きく、地板構成は多様である。製作時期が下るごとに



第222図 前胴地板配置の諸例

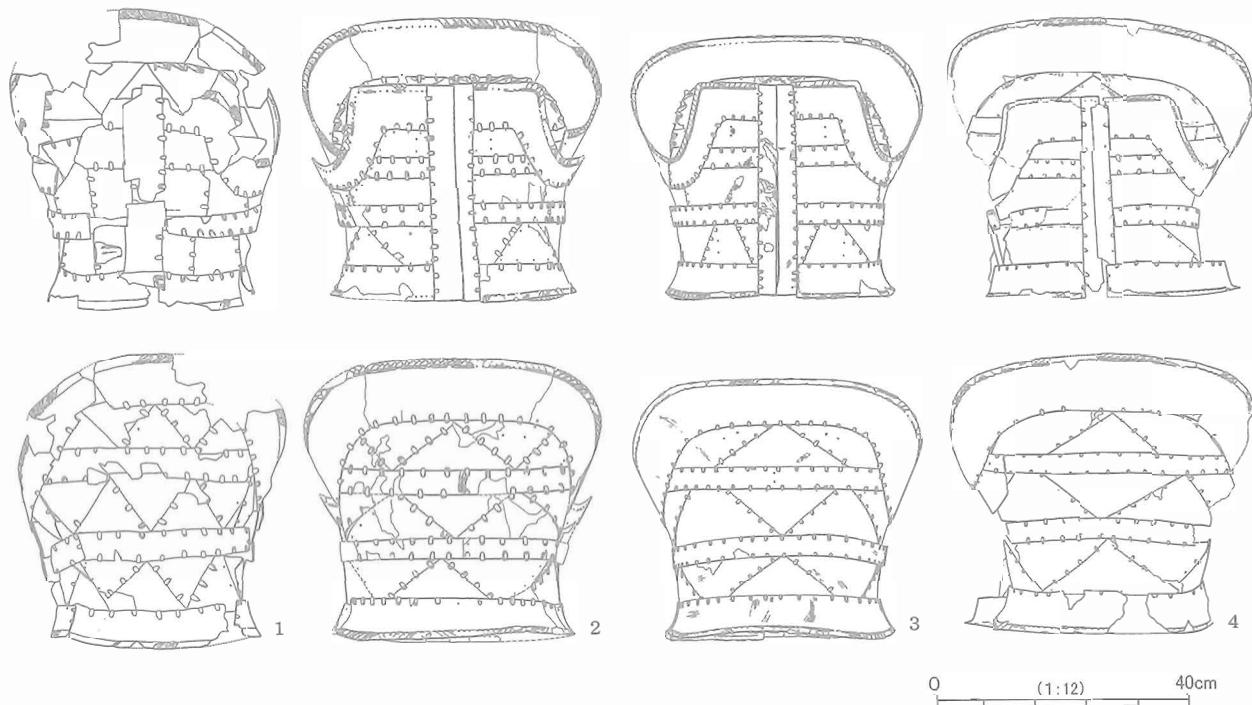
1：老司 2：心合寺山 3：鞍塚 4：原間6号

構成枚数が減じていく短甲変遷の基本原則に合わせば、I類→II類→III類への変化が想定できる。ただし、阪口も指摘するように、三角板革綴短甲の構成地板枚数の数は、厳密に製作時期の差異を反映するとは限らない（阪口1998）。

I類とII類 比較的地板枚数が多い鈍角系三角板革綴短甲として、Ia類で〔11,11〕Bの地板構成をもつ京都府岸ヶ前2号墳例や、同じくIa類で〔9,13〕Aの地板構成をもつ倉科將軍塚2号墳例などが知られる。しかし、これらの古墳が築造された時期は、鉢留技法導入期（中期中葉古段階、TK73型式期）と捉えられ、製品の諸特徴や古墳の築造時期などを総合的に判断すると、鈍角系三角板革綴短甲における最古型式として認めることは難しい。これに対して、鈍角系三角板革綴短甲を出土した古墳の中でも、比較的古い時期（中期前葉）の築造と捉えられる大阪府盾塚古墳からは、IIa類の可能性が高い製品が出土している。また、三角板鉢留短甲においても、Ia類とIIa類の双方が比較的多くみられることから、両者は鉢留技法導入期においても並存していたと捉えてよいだろう。これらのことから、Ia類とIIa類については、前後関係は必ずしも明確ではなく、革綴の比較的早い段階から、鉢留技法導入後の比較的長期にわたって並存していたと捉えられる。

III類 いっぽう、著しく地板枚数が少ないIII類にかんしては、I類、II類よりも後出する要素が多いといえる。III類の三角板革綴短甲を出土した古墳として、金海杜谷43号墳、香川県原間6号墳、福井県向山1号墳などがあげられるが、これらの古墳の築造時期は、鉢留技法導入期（TK73型式期）よりも1～2段階ほど新しい。鉢留短甲においても、III類が頻出するのは、鉢留技法導入期よりも新しい段階になってからと判断できる。三角板革綴短甲の製作時期をどこまで降せて捉えるか、なお検討の余地があるが、地板構成の特徴からは、革綴短甲と鉢留短甲の地板構成の変化に同様の傾向が見出せることから、III類の三角板短甲は、I・II類よりも新しい時期に出現したと判断してよいだろう。

a類とb類 前胴中段地板を分割せず1枚の部材で構成するb類については、研究史の整理において示したとおり、前胴中段地板を三角形に分割するa類よりも新しい傾向が看取できる。本稿でb類とし



第223図 前胴長方形分割の三角板革綴短甲の諸例

1：新沢千塚508号 2：五ヶ山B2号 3：文殊堂11号 4：鞍塚

た、前胴中段地板を分割せず1枚の部材で構成する三角板革綴短甲としては、静岡県五ヶ山B2号墳例、文殊堂11号墳例、鞍塚古墳例、宮崎県六野原8号地下式横穴例、向山1号墳2号短甲、福岡県花聳1号墳例などがあげられる。いずれも、先に検討したとおり、鋤留技法導入期(TK73型式期)かそれ以後に築造された古墳であると捉えられる。

b類の短甲の中では、五ヶ山B2号墳例(Ib類)が最も古式の様相をもつ。古墳の築造時期は鞍塚古墳(IIb類の三角板革綴短甲を出土)とほぼ同段階の鋤留技法導入期と判断できるが、五ヶ山B2号墳から出土した甲冑の様相には鋤留技術の影響が看取できない。五ヶ山B2号墳例の製作段階は、試作的な鋤留甲冑が製作された段階と併行すると捉えてよいだろう(滝沢1999)。

IIIb類についても、向山1号墳2号短甲に知られ、三角板革綴短甲の中でも比較的新しい時期の副葬例としてあげることができる。これらのことから、I・II類ともに、鋤留技法導入期を画期として、a類に加えてb類が出現し、III類においてもa類と比べ、b類の方が後出する要素があるといえよう。

変遷の傾向 以上、鈍角系三角板革綴短甲の変遷としては、大きく、I類・II類→III類という変遷が認められ、各類型中では、Ia類→Ib類、IIa類→IIB類、IIIA類→IIIB類という変化の傾向が認められる。Ib類・IIB類・IIIB類の出現時期は鋤留技法導入期と捉えられ、以後、多系統の地板構成が並存しながら革綴短甲生産の終焉を迎えると想定できる。

(3) 三角板革綴短甲の残存

三角板革綴短甲の副葬例 三角板革綴短甲は古墳時代中期の中でどの程度残存するのだろうか。第28表に、三角板革綴短甲を出土した古墳のうち、鋤留技法が定着した後(中期中葉新段階以降、おおむねTK216型式期以後)に築造されたと考えられる事例を示した。鋤留技法が定着した時期の認定方法としては、長頸鎌もしくはU字形鍬鋤先の共伴を指標とした。長頸鎌とは、頸部長が7cm以上の細根鎌を指す。鋤留技法導入期(中期中葉古段階、TK73型式期)においては、長頸鎌が定型化しておらず、短頸鎌もしくは鳥舌鎌が共伴するといった中期前半的な鉄鎌組成が広範に認められる。長頸鎌の成立は、鋤留技法導入期より若干遅れる傾向がある(鈴木2003)。一般的に長頸鎌の成立は中期中葉新段階に降るといえよう。いっぽう、U字形鍬鋤先は、中期中葉古段階に出現している可能性が高い。ただし、一定量の製品が流通し方形鍬鋤先と主客が逆転するのは、長頸鎌の成立と同じく中期中葉新段階のことと捉えられる(鈴木2005b)。古墳築造時期を認定する方法として問題が残されるものの、U字形鍬鋤先の共伴を鋤留法定着後の古墳を抽出する目安の一つとして捉えておく。

なお、第28表には、古墳の築造時期をうかがううえで参考になる須恵器が出土している場合、その型式名を示した。さらに、鋤留短甲が共伴している場合は、滝沢誠による型式名(滝沢1991)を示した。

三角板革綴短甲副葬の終焉 第28表にあげた古墳の築造時期の検討により、中期中葉新段階(TK216～ON46型式期)の古墳では、三角板革綴短甲がある程度、出土していることに対して、中期後葉に築造された古墳では、副葬例が激減していることが分かる。三角板革綴短甲の副葬は、中期後葉の比較的早い頃(TK208型式期)において、ほぼ終焉を迎えていることが分かる。三角板革綴短甲と共に鋤留短甲においても、滝沢II式の前半段階(IIa・IIb式、TK208型式期を中心とした時期に盛行段階が求められる)までは含まれるが、中期末葉(TK23～47型式期)に盛行段階が求められる滝沢II式の後半段階(IIc式)との確実な共伴例は知られていない。

以上のことから、三角板革綴短甲は中期後葉の前半頃(TK208型式期)までは、ある程度の量が流通しているといえるだろう。製作段階をどの程度さかのばらせるか、伝世の問題を含め慎重に検討する必要がある。ここでは、鋤留短甲と共に鋤留技法をもつ革綴短甲が存在し、ある程度の期間にわたり革綴・鋤留両者に併行した変遷がたどれること、中期中葉新段階以降の三角板革綴短甲を出土する古墳が

第28表 鉄留技法定着後の革綴短甲出土例

所在地古墳名	短甲型式名 (個体名)	共伴冑	共伴甲	短甲 型式 (滝沢 1991)	地板 構成	中・ 下段 地板 枚数	前胴 地板 配置	共伴遺物			古墳 築造時期
								長頭鏡	馬具	U字形 鏡 鷲 先	
群馬県長瀬西	三草短	—	—	—	II a	9, 9	A	○			中期中葉(新)
石川県後山無常堂	三草短	豎鏡眉	—	—	(III b)	(5, 5)	Y	○			中期中葉(新)
福井県向山1号	三草短(1)	—	—	—	III b	5, 7	Y	○			中期中葉(新) ON46
	三草短(2)				等角系	13, 14	Z				
静岡県文殊堂11号	三草短	—	—	—	II b	7, 11	Y (B)	○			中期中葉(新)
京都府青塚	三草短	横鏡衝	—	—	—	—	—	○			中期後葉
大阪府龜井	三草短	鏡衝	—	—	(II)	—	—				TK216
大阪府野中	三草襟付短(8)	革製衝 小鏡眉	三鏡短 横鏡甲	I a	II a	9, 9	A				
	三草襟付短(9)			I a	—	—	—	○	○	TK216	中期中葉(新)
	三草襟付短(10)			—	—	—	—				
兵庫県年の神6号	三草短	—	—	—	II a	9, 11	A		○		中期中葉(新)
奈良県円照寺墓山1号	三草襟付短 (総数不明)	菱鏡眉 小鏡眉 横鏡衝 小鏡衝 横鏡衝	三鏡短 横鏡短	II b II b / c	—	—	—	○	○		中期後葉
奈良県市尾今田1号	三草短	小鏡衝	三鏡短	不明	—	—	—	○			中期後葉
	三草短				—	—	—				
奈良県新沢139号	三草短	豎広鏡眉	—	—	I a	9, 11	B	○			中期中葉
香川県原間6号	三草短	—	—	—	III a	7, 7	Z		○	TK216	中期中葉(新)
福岡県花巻	三草短	—	—	—	(II b / III b)	(7 / 9, 7)	Y (B)	○	○		中期中葉(新)
宮崎県六野原8号	三草短	小鏡眉	—	—	II b	(7, 9)	Y (A)		○		中期後葉

三草短：三角板革綴短甲 三草襟付短：三角板革綴襟付短甲 三鏡短：三角板鏡留短甲 橫鏡短：横矧板鏡留短甲

革製衝：革製衝角付冑 鏡衝：鏡留衝角付冑 小鏡衝：小札鏡留衝角付冑 橫鏡衝：横矧板鏡留衝角付冑

小鏡眉：小札鏡留眉庇付冑 菱鏡眉：菱形板鏡留眉庇付冑 豊鏡眉：豎矧板鏡留眉庇付冑 豊広鏡眉：豎矧広板鏡留眉庇付冑

築造時期／中期中葉(古)：TK73 中期中葉(新)：TK216～ON46 中期後葉：TK208～TK23 中期末葉：TK23～TK47

パーセン内的情報は不確実であることを示す

相当量みられることを考えると、三角板革綴短甲は鉄留技法導入後も、ある程度の段階（おおむねTK216型式期）まで製作が継続していた可能性があると指摘しておこう。

文殊堂11号墳例の位置づけ 文殊堂11号墳例の編年的位置づけについても、報告部分で触れたように、三角板革綴短甲として後出的な属性に注目したい。本稿の分類では、II b類、[7, 11] Y (B) の地板構成をもつ点に加え、①中央の地板を除き地板の形状が三角形ではなく台形をなすこと、②革組覆輪が革紐の交差が表面に表れない手法であること、といった属性が、他の短甲との比較検討において有効な視点であるといえよう。属性①・②ともに新相を示す特徴といえ、本例が三角板革綴短甲の中でも製作段階が新しいものと捉える根拠となりえる。具体的な製作段階はある程度の時間幅をもって捉える必要があるが、須恵器型式と対応させるとすれば、おおよそTK216型式併行期を中心として前後する時期に対応するといえよう。

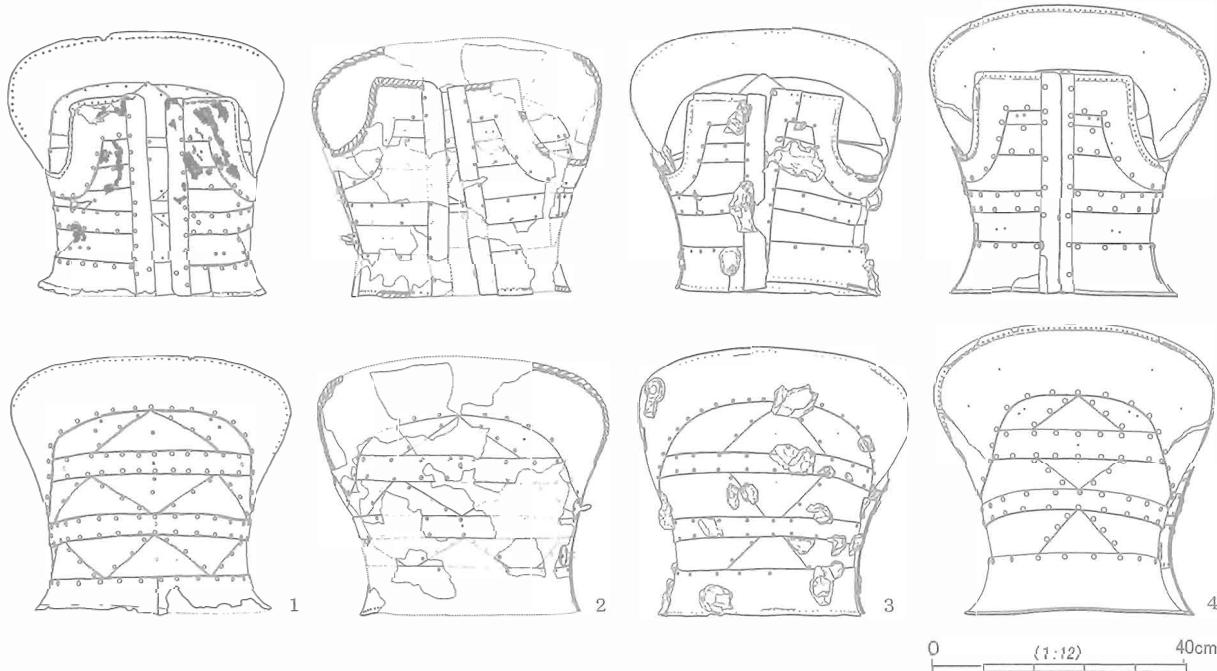
(4) 三角板鉄留短甲の終焉

前胴長方形分割の三角板鉄留短甲 いわゆる「三角板横矧板併用鉄留短甲」の認識は、前胴中段地板に三角形の分割がみられない（本稿のb類）鉄留短甲をすべて捉える広義の見方と、下段地板に至るまで前胴はすべて横矧板を採用している鉄留短甲のみを捉える狭義の見方がある。本稿では、革綴短甲との関連性を重視する立場から、これらの評価を一旦保留し、前胴に横矧板を用いても後胴の地板を三角形に分割する鉄留短甲すべてを三角板鉄留短甲の一類型として捉えている。地板構成では、鞍塚古墳例（革綴）と宮崎県島内3号地下式横穴例（鉄留）は、II b類、[7, 9] Yという特徴が一致している。

第29表 前胴長方形分割の三角板鉢留短甲

所在地・古墳名	三角板 構成類型	滝沢型式 (滝沢1991)	上段帶金 連接數 (上側) 後胴 前胴	地 板 枚 數			地 板 分 割 枚 数	開 關 裝 置	蝶 番 金 具	覆 輪
				上段(堅上2)		中段 (長側1)				
大阪府西小山	II b	I a/b		3	2	(7)	(5)	(15)	両脇開閉	長2 革包
大阪府孤塚	—	(I a/b)	—	—	—	—	—	—	両脇開閉?	— —
奈良県円照寺墓山1号(2)	II b	II b	8	3	2	7	(9)	(21)	両脇開閉	長2 革組
宮崎県島内3号	II b	II a	11	3	2	7	9	21	胴一連	— 革包
千葉県八重原1号	II b	II a	8	3	2	7	7	19	右脇開閉	約3 革組・鉄包
奈良県今井1号	—	—	—	—	—	—	—	—	—	— —
島根県塚山	(II b)	II a/b	—	(3)	—	—	(7)	—	両脇開閉	長2 革組
岡山県仙人塚	—	(II b)	10	—	—	—	—	—	右脇開閉	長2
長野県新井原7号	III b	II a	10	3	2	5	5	15	右脇開閉	— 革包
昌寧校洞3号	(III b)	II b	8	3	(2)	(5)	(5)	(15)	右脇開閉	長2 鉄包
京都府宇治二子山南(1)	III b	II b	8 or 9	3	2	5	5	15	右脇開閉	長2 鉄包
奈良県後出3号	III b	II b	9	3	2	5	5	15	右脇開閉	方4 革包
静岡県林2号	III b	II b	7	3	2	5	5	15	右脇開閉	方3 革包・鉄包

塚山例は破片数が少なく、前胴長方形分割でない可能性がある
 孤塚例、今井1号墳例は、実測図・写真等が公表されておらず、前胴長方形分割の指摘が確認できるのみ
 パーレン内の情報は不確実であることを示す

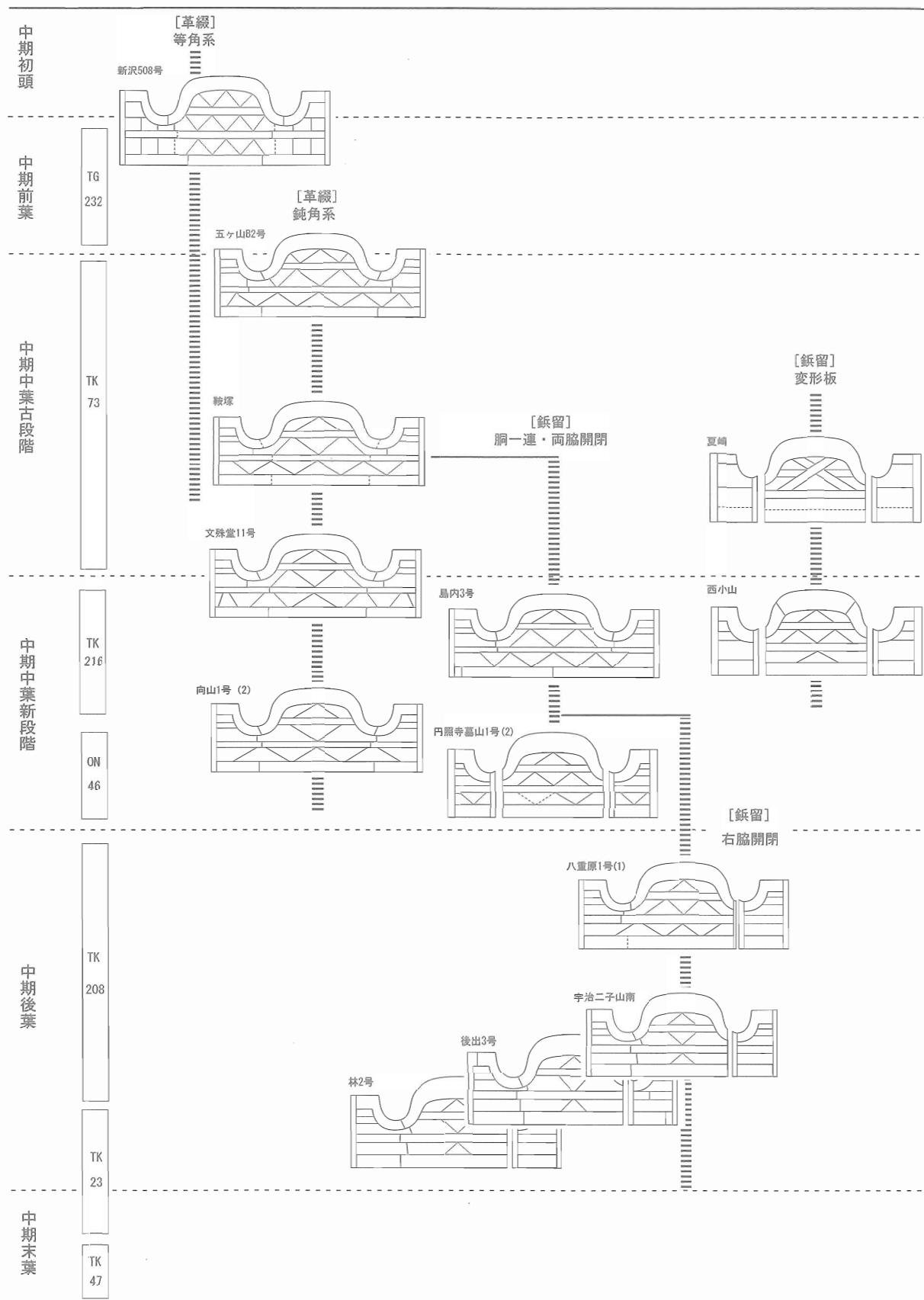


第224図 前胴長方形分割の三角板鉢留短甲の諸例

1：島内3号地下式横穴 2：八重原1号 3：後出3号 4：林2号

文殊堂11号墳例も、上記2例の地板構成とは、前胴下段地板の最前分割の有無という違いしかなく、互いに関連性が高い一群といえる。

前胴長方形分割の三角板鉢留短甲は、吉村が指摘するように（吉村1988）、比較的長期の系譜関係があとづけられる。島内3号地下式横穴例から八重原1号墳1号短甲などを介して、林2号墳例にみられるIII b類、[5, 5] Yという地板構成をもつ一群に連なる系譜が想定できる。林2号墳例と同様の地板構成は、長野県新井原7号墳例、後出3号墳第2主体例、宇治二子山南墳例に認められる。さらに、昌寧校洞3号墳例も同様の地板構成である可能性がある。前胴長方板分割の三角板短甲は比較的多様で、地板構成が一致する例が少ない中で、III b類、[5, 5] Yの一群は類例が多く、資料的にまとまっている。これらの例は、下段地板の構成枚数が5枚と少なく、現在のところ、同様の地板構成をもつ革綴短甲は



第225図 前胴を長方形分割する三角板短甲の系譜

知られていない。Ⅲ b類、[5, 5] Yの一群は、連接数や蝶番金具、覆輪技法などに細差があるものの、滝沢編年においても、滝沢Ⅱ b式を中心とした段階に集中しており、製作段階が比較的短期間であったと考えられる。

Ⅲ b類、[5, 5] Yの諸例は、いずれも三角板鈕留短甲の中でも最新の様相をもつ。三角板鈕留短甲の最終末の形態を示していると評価できるだろう。「三角板横矧板併用鈕留短甲」の認識を狭義に捉え、Ⅲ b類、[5, 5] Yの一群を指すものと定義すれば、三角板横矧板併用鈕留短甲は三角板鈕留短甲の盛行期から横矧板鈕留短甲の盛行期の移行期にみられる型式であるとの評価も可能であろう。

林2号墳例の位置づけ 三角板鈕留短甲は、滝沢が明示したように、横矧板鈕留短甲の生産停止よりも早い段階で生産が終焉を迎えると捉えられる。古墳の副葬例においても、中期末葉に築造された古墳から三角板鈕留短甲が出土することは少ない。最終末の様相をもつ三角板鈕留短甲としては、連接数が7と少ない大阪府黒姫山古墳7号短甲や滋賀県雲雀山2号墳例とともに、林2号墳例をあげることができる。

林2号墳例は、三角板鈕留短甲の中でも使用される鈕の直径が0.8~0.9cmと大型で、後胴上段帶金の上側の連接数は7と三角板鈕留短甲の中でも最少の部類に入る。帶金と地板の幅の比率も近似し、裾板が肥大化するなど、最終段階（滝沢Ⅱ c式）の横矧板鈕留短甲との形態上の類似点が多い。滝沢Ⅱ c式の横矧板鈕留短甲との形態的類似が多い本例こそ、三角板鈕留短甲の最終末の様相を象徴していると評価できるだろう。

三角板鈕留短甲の終焉 鈕留短甲の最新式である滝沢Ⅱ c式は、横矧板鈕留短甲に限定できることから、滝沢Ⅱ b式が下限の三角板鈕留短甲は、短甲生産の最終段階より前に生産が終了している可能性が高い。滝沢Ⅱ c式が中心的に生産された時期を中期末葉（TK23~47型式期）と捉えれば、林2号墳例に代表される三角板鈕留短甲の最終末形態の生産は、中期後葉（TK208~23型式期）の中に求めることが妥当であろう。三角板鈕留短甲の終焉にあえて理念的な定点を示すとすれば、TK208~23型式の中でも、よりTK23型式期に近い時期が想定できる。

4. 前胴長方形分割の三角板短甲の系譜

前胴長方形分割の系譜 ここまで検討において前胴を長方形に分割する三角板短甲について、革綴から鈕留に至る一つの系譜として捉えられる可能性を示してきた。ただし、ここで整理した前胴長方形分割の系譜とは、製作工人や工房が一連のものであることを必ずしも意味しない。前胴長方形分割の三角板短甲の覆輪や蝶番金具などに多様性があり、共通する属性が地板構成以外には見出しがにくいことを考慮すると、前胴長方形分割の変異形態が生まれる要因が長期的に持続していることを示しているといえよう。前胴長方形分割の三角板短甲を長方板革綴短甲や横矧板鈕留短甲との折衷的な製作と捉えるか、三角板短甲を基本として前胴のみ三角形分割を省略したものと捉えるかで、前胴長方形分割の系譜の評価も大きく異なる。こうした系譜の評価にかかわり、以下、三角板短甲における前胴長方形分割が出現する意味について触れておこう。

後胴重視の傾向 短甲において、後胴の形状を重視していたと想定できる特徴は数多い。五ヶ山B2号墳例や、兵庫県年の神6号墳例など、後胴の上段地板のみ三角板の分割枚数が多い事例などは、後胴重視の傾向を顕著に示している事例といえるだろう。鈕留短甲においても、後胴重視の傾向は数多く看取できる。岐阜県中八幡古墳や、福井県二本松山古墳から出土した三角板鈕留短甲は、後胴上段地板が通有の鈕留短甲より2枚多い5枚で構成されていることに対して、前胴の分割は通有の分割に留まる。

さらに、佐賀県夏崎古墳例や佐賀県円山古墳例にみると、前胴には長方形分割の地板をもちいるものの、後胴に手の込んだ造作がみられる特殊な鉢留短甲も知られている。とくに、円山古墳例の前胴は通有では7段構成であるところが5段構成であり、前胴長方形分割の三角板鉢留短甲である大阪府西小山古墳例と共に通有する。4段構成の可能性が高い夏崎古墳例も形態の発想上は円山古墳例や西小山古墳例と通底するあり方をみせていると考えられよう。

短甲に限らず、一つの製品の中には、とくに手の込んだつくりを志向する部分がある。土器では、口縁端部をとくに念入りに造作するような事例があてはまる。このような「丁寧さの違い」はエラボレーションの度合いの差と呼ばれ、その度合いが高い部分に製品がもつ性格が端的に表れるものとして評価されている。短甲の多くは後胴中央部が最もエラボレーションの度合いが高く、製作物にかかわる象徴的な意味が最も表出した部位として認識できるだろう。

前胴長方形分割の意義 上述のように、三角板短甲の中で最も重視されているのが、後胴中央部であると評価できる。三角板短甲における三角形分割の省略は、前胴にとどまらず、脇部においても認められる。地板構成Ⅲ類の出現は、前胴長方形分割と通底する製作意図を読み取ることができ、三角板短甲の終焉期においては、後胴の中軸線しか三角形に分割しない林2号墳例のような事例が出現するものと捉えられる。後胴を明確に三角形分割する意識は最終段階まで堅持されることに対して、前胴の分割省略は比較的早い段階からみられるようになると評価できるだろう。

5. 結語

以上、文殊堂11号墳、林2号墳から出土した特長的な地板構成をもつ三角板短甲の編年的位置づけの検討を通して、三角板革綴短甲および三角板鉢留短甲の終焉について整理した。この作業を通じて、三角板短甲の地板構成について分類を行い、革綴短甲、鉢留短甲双方における地板構成の変遷大綱を明らかにしたと共に、前胴長方形分割の三角板短甲が革綴から鉢留まで一連の系譜として捉えられる可能性を示した。さらに、前胴を長方形分割する三角板短甲が生まれた背景として、短甲の部位にかかわるエラボレーションの度合いの違いに注目し、短甲の後胴中央部に対する認識の強さを指摘した。

三角板短甲の地板構成の変遷については、未だに整理が充分なされているとはいえない。革綴短甲、鉢留短甲を横断的に分析できる他の属性、例えば、地板形状（三角形か台形か、三角板の端部を断ち落としているか否かなど）、連接位置、連接数、覆輪、組立工程などを総合的に分析していく視点が求められるだろう。

(鈴木一有)

参考文献

- 石部正志 1981 「508号墳」『新沢千塚古墳群』 奈良県立橿原考古学研究所
- 小林行雄 1982 「古墳時代の短甲の源流」『日韓古代文化の流れ』 帝塚山考古学研究所
- 小林謙一 1974 「甲冑製作技術の変遷と工人の系統（上）」『考古学研究』第20巻第4号
- 阪口英毅 1998 「長方板革綴短甲と三角板革綴短甲」『史林』第81号第5巻
- 末永雅雄（編） 1991 『盾塚 鞍塚 珠金塚古墳』 由良大和古代文化研究協会
- 鈴木一有 1996 「三角板系短甲について」『浜松市博物館館報』VII
- 2003 「中期古墳における副葬鐵の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集
- 2004 「下開発茶臼山9号墳出土甲冑の検討」『下開発茶臼山古墳群II』 辰口町教育委員会
- 2005a 「中八幡古墳出土短甲をめぐる問題」『中八幡古墳資料調査報告書』 池田町教育委員会
- 2005b 「鉄器の受容からみた古墳時代中期の東海」『考古学フォーラム』17
- 滝沢 誠 1991 「鉢留短甲の編年」『考古学雑誌』第76巻第3号
- 1999 「甲冑類の編年的位置と性格」『五ヶ山B2号墳』 浅羽町教育委員会
- 2001 「多田大塚古墳群出土の短甲をめぐって」『静岡県の前方後円墳』 静岡県教育委員会

- 田中晋作 1981 「武器の所有形態からみた古墳被葬者の性格」『ヒストリア』第93号
 田中新史 1975 「五世紀における短甲出土古墳の一様相」『史館』第5号
 野上丈助 1968 「古墳時代における甲冑の変遷とその技術史的意義」『考古学研究』第14巻第4号
 藤田和尊 1984 「頸甲編年とその意義」『関西大学考古学研究紀要』4
 1988 「古墳時代における武器・武具保有形態の変遷」『樋原考古学研究所論集』第8 吉川弘文館
 吉村和昭 1988 「短甲系譜試論」『考古学論叢』第13冊 樋原考古学研究所



言及した古墳文献

- 金海杜谷43号 宋桂鉉ほか 1999 『古代戦士』 釜山福泉博物館
 昌寧校洞3号 沈奉謹ほか 1992 『昌寧校洞古墳群』 東亜大学校博物館
 千葉県八重原1号 杉山晋作・田中新史 1989 『古墳時代研究III』 古墳時代研究会
 長野県新井原7号 末永雅雄 1934 『日本上代の甲冑』 岡書院 (図版31)、岩崎卓也・松尾昌彦 1988 「武器・武具」『長野県史』考古資料編 全1巻 (4) 遺構・遺物
 長野県倉科将軍塚2号 木下正史・滝沢誠・矢島宏雄ほか 2002 『更埴市内前方後円墳範囲確認調査報告書一有明山将軍塚古墳・倉科将軍塚古墳一』 更埴市教育委員会
 福井県向山1号 上中町教育委員会 1992 『向山1号墳』
 福井県二本松山 斎藤優 1979 『改訂 松岡古墳群』 松岡町教育委員会
 岐阜県中八幡 橫幕大祐・内山敏行・鈴木一有 2005 『中八幡古墳資料調査報告書』 池田町教育委員会
 静岡県五ヶ山B2号 鈴木一有(編) 1999 『五ヶ山B2号墳』 浅羽町教育委員会
 滋賀県雲雀山2号 直木孝次郎・藤原光輝 1953 『滋賀県東浅井郡湯田村雲雀山古墳群調査報告』『大阪市立大学文学部歴史学教室紀要』第1冊 大阪市立大学文学部歴史学教室
 京都府宇治二子山南 杉本宏(編) 1991 『宇治二子山古墳』 宇治市教育委員会
 京都府岸ヶ前2号 門田誠一(編) 2001 『園部岸ヶ前古墳群発掘調査報告書』 佛教大学校地調査委員会
 大阪府狐塚 小林行雄 1962 「狐塚・南天平塚の調査」『大阪府の文化財』 大阪府教育委員会、柳本照男 2005 「狐塚古墳」『新修豊中市史』第4巻考古 豊中市、なお [小林謙一1974] p54に狐塚例への言及がある
 吉田珠己・藤井淳弘(編) 2005 『史跡心合寺山古墳整備事業報告書』 八尾市教育委員会
 北野耕平 1976 『河内野中古墳の研究』 大阪大学文学部国史研究室研究報告 第2冊
 末永雅雄(編) 1991 『盾塚 鞍塚 珠金塚古墳』 由良大和古代文化研究協会
 梅原未治・末永雅雄 1932 「淡輪村西小山古墳とその遺物」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第3輯
 末永雅雄・森浩一 1953 『河内黒姫山古墳の研究』 大阪府教育委員会
 奈良県円照寺墓山1号 佐藤小吉・末永雅雄 1930 『円照寺墓山第1号古墳調査』『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』第11冊
 奈良県今井1号 藤井利章 1984 「今井1号墳発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1983年度(第2冊分) 奈良県立樋原考古学研究所
 奈良県新沢508号 石部正志 1981 「508号墳」『新沢千塚古墳群』 奈良県立樋原考古学研究所
 奈良県後出3号 西藤清秀・吉村和昭ほか 2003 『後出古墳群』 奈良県立樋原考古学研究所
 岡山県仙人塚 沼田頼輔 1901 「備中小田郡新山村古墳発見の鎧に就いて」『考古界』第1篇第1号
 東山信治・熱田貴保・深田浩 2002 「塚山古墳」『田中谷遺跡 塚山古墳 下がり松遺跡 角谷遺跡』島根県教育委員会
 香川県原間6号 片桐孝浩 2002 『原間遺蹟II』 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第42冊 香川県教育委員会
 福岡県老司 山口謙治・吉留秀敏・渡辺芳郎(編) 1989 『老司古墳』 福岡市教育委員会
 福岡県花轟1号 宮田浩之 2001 『花轟古墳群』『小都市史』第4巻資料編 小都市
 佐賀県夏崎 伊万里市史編さん委員会 2006 『伊万里市史』原始・古代・中世編 伊万里市
 佐賀県円山 埋蔵文化財研究会 1993 『甲冑出土古墳にみる武器・武具の変遷』
 宮崎県六野原8号地下式横穴・島内3号地下式横穴 茂山護ほか 1982 『宮崎県総合博物館収蔵資料目録 考古・歴史資料編』 宮崎県総合博物館

挿図出典

- 第221図・第225図 筆者作成
 第222図・第223図・第224図 各報告文献より引用